

岩手医科大学歯学会第13回例会抄録

日時：昭和57年2月27日（土）午後1時30分

会場：岩手医科大学歯学部講堂

演題1 多形性腺腫における脂肪組織の病理組織学的検討

○佐島三重子, 武田泰典, 鈴木鍾美

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座

過去12年間に当講座で扱った多形性腺腫の自験例35例についてこれらの脂肪組織を中心に検討し、以下の結論を得た。

脂肪組織の出現程度を4段階に分け、脂肪組織が全くみられないものを(-), わずかにみられるものを(±), 全断面の約1/4以下にみられるものを(+), 1/4以上みられるものを(++)とした。35例のうち9例(25.7%)に脂肪組織の出現がみられ、脂肪組織の出現の程度は(±)が2例, (+)が6例, (++)が1例であった。初診時平均年齢は全体の42.3才に対して、脂肪組織のみられた9症例の平均年齢は31.1才であった。発生部位の内訳は口蓋4例, 頬部3例, 口唇および耳下腺がそれぞれ1例であった。大きさでは拇指頭大, 胡桃大のものが多かった。症状の自覚より受診までの平均時間は、全体の3.2年に対して9例の平均は5.1年とやや長かった。

これら脂肪組織の認められたすべての症例では、上皮細胞の胞体内には脂肪が認められず間質成分として脂肪細胞がびまん性あるいは結節状に存在していた。脂肪組織増生の理由については、頬部, 軟口蓋, 口唇などに発生した症例に脂肪組織のみられたものが多く、これらはもとより豊富に存在する脂肪組織が腫瘍組織内に包括されることが一因と思われた。また症状の自覚より受診までの平均期間が、脂肪組織を伴う症例ではやや長かったことから、長期の経過を経たものでは腫瘍細胞の変性などにより補空的に脂肪組織が増生したとも考えられた。

また9症例のうち脂肪組織の著明にみられた28才女性例について、病理組織所見を中心に報告した。

演題2 歯科インプラント(チタン合金ブレード型)の臨床的成績と実験病理学的成績について

○梅原正年, 板垣光信, 佐島三重子
武田泰典, 鈴木鍾美

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座

近年歯科インプラントを手掛ける臨床家が急速に増え、かつ歯科インプラントの確実な臨床的效果と成功を期待できると信じる臨床家が増えてきた。併し反面慎重な臨床家であればある程今後の成り行きを注意深く見守っていることと思う。インプラントを原点に帰って考えてみるといろいろの問題が挙げられるが、特にインプラントと組織反応を考えてみても骨とインプラントの関係は手術後、創傷の治癒に伴って種々の影響で骨の吸収と添加が起り、常に大なり小なり線維性結合織膜で覆われる。このインプラントを取りまく薄層の線維性結合織膜が将来理想的な歯根膜のショック、アブソーパー的役割を果たすようになると思う。併しインプラント頸部と上皮の問題は歯肉組織がポスト頸部をどの程度に封鎖できるかがインプラントの泣きどころとされており、今回この問題についていささかの実験を行ってみた。すなわち、通法にに従ったワンピースブレードインプラント埋入法と、我々が考案したツウピースブレードインプラントとを比較する目的で成犬を使って実験病理学的観察を行い、更に臨床で応用した例で比較した。

結果はワンピースブレードインプラントよりツウピースブレードインプラントの方が極めて良好で、いずれも大なり小なり炎症性肉芽組織が認められるが、深部へ向っての歯肉上皮の侵入増殖はワンピースブレードインプラントよりツウピースブレードインプラントの方が軽度で止っていた、このことは、ツウピースブレードインプラント後4年あるいは5年経過した臨床例のX線写真において、ワンピースブレードインプラント例にみられるような頸部における垂直方向の骨吸

収がいまだに全くみられなかったことを裏付けるものと考えられた。

質 問：佐藤 匡（口生理）

1. 骨組織の増殖に対して通電電流の方向によって促進あるいは抑制効果があるといわれているが、これとの関連はどうか。

2. 埋め込む金属のボディ一部分では電流密度が小さく、ポスト部分ではこの密度が大きくなるので、ポスト部分に骨組織の電流による変化が現われると思われるがどうか。

質 問：甘利 英一（小歯）

チタン合金の組織親和性はどうか。

回 答：梅原 正年（口病理）

○佐藤先生の質問に対して

1. 臨床的に通電電流の方向による骨の吸収は正確に判別できないが、それと思われるものも予測される。

2. 御意見の通りと考え、分割インプラントではボディ一部分にチタン合金を、ネック部分にバイオセラムまたは細いチタン合金にポーセレンをコーティングしたものを使用した。

回 答：鈴木 鍾美（口病理）

○甘利先生の質問に対して

今回使用したチタン合金はコバルトクロームチタン合金で、すでにコバルトクロームが非常によい生体組織反応を示すことが確認されている。今回のチタン合金の組織反応がよい結果を示していることから、チタン単独の反応もよい結果を示すことが想像される。

演題3 低位乳歯の ankylosis の組織学的検討、後続永久歯欠如例について

○武田 泰典, 八幡 ちか子, 鈴木 鍾美

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座

乳歯の低位をきたす原因には種々のものが考えられており、その一つとして後続永久歯の欠如も大きな因子となっている。また、低位乳歯は顎骨と癒着をきたすことが多く、咬合と歯槽骨の発育に大きな影響を与えるものと考えられる。一方、交換期の乳歯は後続永久歯の萌出に因る組織圧により歯根が吸収されると考えられている。勿論、乳歯根の吸収には後続永久歯に因る組織圧以外にも多くの因子が関与しているものと思われるが、多数の後続永久歯が先天的に欠如した症

例では残存乳歯の根吸収は軽度であるとする報告が多く乳歯根吸収における後続永久歯の果す役割は重要なものと思われる。多数の後続永久歯の先天的欠如例そのものはそれほど稀なものではないが、ここに紹介した演者らの症例では残存乳歯が著しく低位に位置し、また、後続永久歯が欠如しているにもかかわらず、乳歯根に著明な吸収と ankylosis がみられた。このような症例について抜去乳歯ならびに周囲骨組織との関連等について検索した報告は少ないために、その組織像を中心に供覧した。症例は18才の男子で、EDCB|CDEの残存がみられ、X線的に5432|2345の欠如が確認された。また、残存乳歯の歯根の吸収は顕著であるにもかかわらず、動揺はほとんどなかった。さらに、歯槽骨の発育は極めて悪かった。これらの残存乳歯を抜去し、非脱灰研磨標本として観察した。歯根象牙質の大部分は吸収されており、その部に歯槽骨が癒着していた。さらに骨象牙質癒着部近くの象牙質の象牙質細管の走行は不規則となり、偏光で複屈折を示していた。象牙質吸収面に破歯細胞は認められなかった。また乳歯の吸収はエナメルセメント境界より上方に及んでいたが、エナメル質の吸収は明らかではなかった。一方、歯髄は象牙質を吸収置換した骨組織中に多少とも残存する傾向にあった。

質 問：甘利 英一（小歯）

1. 破骨細胞、破歯細胞がみられなかったようだが、象牙質・エナメル質の吸収はどのような機序によるものか。

2. 咬合していない乳歯で歯根が存在し、さらに骨の形成がみられたが、どのような原因が考えられるか。

質 問：野坂 洋一郎（口解1）

骨芽細胞が存在していないが、骨の形成機序としてどのようなことが考えられるか。

回 答：武田 泰典（口病理）

○甘利先生の質問に対して

1. 硬組織の吸収には破骨細胞、破歯細胞が関与するものとしていないものがあり、後者と考えている。

2. 原因は全くわからない。

○野坂先生の質問に対して

骨と象牙質の間には細胞成分は全くみられなかった。

演題4 乳歯の外傷固定法の一考案

○野坂 久美子, 佐々木 仁弘, 守口 修